

12-3 二十六夜神伝説ガイド

1、古城会が配布する「二十六夜神の由来」

国宝松本城 守護神 二十六夜神由来

松本城天守閣六階の梁の上にお宮のあることは一般に知られておりますが、このお宮についての伝説は次の通りであります。

戸田丹波守康長公が高崎から松本へ入城したのは元和三年でありますが、其翌年（西暦一六一八）一月二十六日のお天守番は川井八朗三朗清良であった。川井氏は二連木

以来の戸田家の古い家臣で二百五〇石取りの中堅藩士であった。ところが其夜の月出の時刻頃に、誰とも知らず『八朗三郎』と呼ぶものがあるので、ふと目をさますと目前には、白衣に緋の袴を着けた神々しい女神があらわれているので思わず平伏すると錦の袋をお渡しになって『我ハ二十六夜神デアルガ、コレカラ後ワレヲ天守ニオ祀リシテ毎月コノ日ニ三石三斗三升三合三勺ノオ餅ヲ付イテオ祝イスレバ松本城ハ永久ニ安泰デアリ、マタオ勝手向ガ豊カニナル。而シテコノ袋ハ開封スルデハナイ』と仰せられた。八朗三郎は『ハッ』とお受けして頭をあげると、もう姿は消えてしまった。翌朝城主康長公に事の仔細をお話し申上げると康長公は『それは神のお告げであるから即刻其通りに行え』と仰せられた。この仰せによって其翌月の二十六日に初めてこのお宮が祀られたのであると伝えられている。

それ以来松本藩では、明治維新に至るまで毎月お祭りを欠かした事がなく、廃藩後も戸田家においては東京の邸内に祠を建て、お祭りを続けているという。その川井家は現に北安曇郡大町市六日町におられ、当主川井善良氏で同家においても代々篤く崇敬して来ているという。

皆様どうぞ御参拝を願います。

松本市古城会
二十六夜神会

2、川井家と二十六夜神（月待ち信仰）

二十六夜の月の中に三尊仏の姿が現われるといわれた7月26日の月の出（二十六夜）には、一目拝もうと眺めのよい高台や海辺に人々が集まり賑わった。二十六夜の月の上に三尊仏の姿が見られると、一年間無病息災でいられると伝えられている。あやかりたい一心での信仰であろうか。

二十六夜御神体は、明治初年まで天守梁上に祀られていたが、明治4年8月26日に戸田藩主の命で川井家十六代の元良氏が奉持して、川井家の住居である大町市六日町に遷座された。松本城天守6階に祀られること実に、250余年におよんでいる。

昭和の解体復元工事が完了した昭和30年10月8日には再び天守上に遷座された。大町市の川井家に移ってからは、85年間に及んでいる。

松本城元城主戸田家におかれても、東京へ移られてから毎年二十六夜神の祭祀を執り行い、御勝手元繁昌の祈願が続けられておられるという。

川井家でも、二十六夜真仮御神体を東京へ遷座され、祭祈をおこなっておられるという。松本城の年祭（11月3日）には出席され祈念されている。



川井家にて出発前の祭事

3、二十六夜神幟旗について

「玄天玉蟾」

(げんてんぎょくぜん)

玄天 —— 北方の天、又広く
天をいう

玉蟾 —— 月の異称

解釈 広く大きい宇宙（天）の中に月（二十六夜神）がある。

右幟旗



左幟旗



「神徳無邊」

(しんとくむへん)

神徳 —— 神の恵み、神の加護

無邊 —— 広大で果てしない

解釈 神（二十六夜神）の恵みや加護は、広大無邊である。

上條^そ憐山謹書 平成4年11月生日足日
(上條源七先生)

生日足日 (いくひのたるひ) と読む。意味は、生き生きと
榮えて充実した日。即ち吉日をいう。

